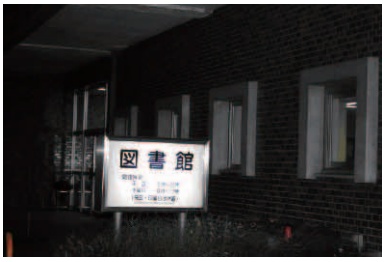
図書館だより

No.73　　December , 2008



目　次

巻頭エッセイ　名著とのつきあい・・・・・・・・・・電気電子工学科　長田芳裕・・・1
読書のすすめ　自らの人生観とライフスタイルを模索しよう！
・・・・・・・一般文科　明官秀隆・・・2
読書から学ぶもの・・・・・・・・・・・・・一般文科　赤塚康介・・・3
島尾ミホ著「海辺の生と死」・・・・・・・・一般理科　宮地俊彦・・・4
私の一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・各学科学生６名・・・・・・・・・・5
リレー連載「古典への誘い」　コロ助の科学質問箱　佐々木宗雄監修、内山安二絵
・・・・・・・生物応用化学科　笈木宏和・・・6
平成２０年度（後期）図書館利用統計・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
Information 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Kurume National College of Technology library
久留米工業高等専門学校図書館

巻頭エッセイ

名著とのつきあい

電気電子工学科　長田　芳裕

名著といわれる文学作品は数多くあります。しかし、〝何某文庫１００選、何某文庫１００冊〟といったキャンペーンにリストアップされているものの中には名著どころか良書ともいえない本も混在しています。つまり、文学作品は評価する人の思想、好み、立場により価値が決まる面があり、万人が名著と認める文学作品は限られてきます。

これに対して、工学の本は内容が科学技術の真理に関する記述であるため、優れた本は該当分野のほとんどの専門家により名著と認められています。また、工学の本が名著である要件の一つは、時宜にかなった改訂により内容がアップデートされて常に技術者に活用され、科学技術の進歩に貢献していることではないでしょうか。そうでなければ、たとえ出版時に優れた本であっても時が経てば〝歴史的書物〟にしか過ぎません。

こういった観点で私の専門である半導体工学関連の本を見ると、キッテル著「固体物理学入門」（１９５３年初版発行）は名著と称するにふさわしい本です。著者のキッテルは磁性と半導体を専門とし、カリフォルニア大学バークレー校の教授でした。

私がこの本に出会ったのは学部学生のとき行った輪講で、第３版をテキストとして勉強しました。記述が明確で図がビジブルで分かりやすく、目から鱗が落ちる思いでした。また、技術者がパイプをくわえながら結晶成長をしている写真には驚きましたが、さすがにその後この写真は削除されました。この本は改訂を繰り返しより分かりやすくなり、さらにナノ構造のような新しい章も追加されてきています。現在は２００５年発行の第８版が最新版です。この本は世代を超えて広く支持されているようで名著たる所以です。

Sze（ジィー）著「Physics of Semiconductor Devices」も名著と思います。著者のジィーは台湾出身で、米国スタンフォード大学で博士号を取得後、ベル研究所に勤務して不揮発性半導体メモリの研究に邁進する傍ら１９６９年に本書を上梓しました。その後、台湾に戻り国立交通大学の教授と国立ナノデバイス研究所の所長をしています。かつて技術提携で一緒に仕事をした台湾の技術者が、「私の出身大学にはジィー教授がいる。」と誇らしげに語っていました。

私は修士学生のとき、研究室の夏季合宿でこの本の主要な章の輪講をしました。助教授、助手、大学院生合わせて１０数名が山寺の宿坊に泊まりこんで、外界から隔絶されてひたすら輪講に没頭したことを思い出します。この本は半導体デバイスの幅広い分野を網羅しており、文献リストが充実していて、一人の著者がこのような本を執筆したことに驚き圧倒されました。この本も改訂が行われて実験データがアップデートされ、文献リストが増補され、新しい半導体デバイスの記述も追加されています。２００７年にセンサーの章が追加されて、第３版が発行されました。また、この本は論文によく引用される専門書としても有名です。

私にとってキッテルの本とジィーの本は技術者としてのバックボーン形成の一環として役立っており、社会に出てからもこれらの本を必要に応じて参照してきました。これらの息の長い本を目利きよく輪講のテキストとして取り上げてくださった恩師には深く感謝しています。

教員になって、学生に名著について語り継ぐのも責務と考え、学生の研究指導に際しては折にふれこれらの本を用いて説明して名著の息吹を感じさせようとしています。また、半導体を職業にしようという学生にはジィーが教科書として易しく書いた「半導体デバイス」（１９８５年初版発行、２００５年第２版発行）を薦めています。

ここに挙げた名著とのつきあいは学生時代に始まり、３０年以上を経て現在に至っています。名著から学び、やがてそれを友とし、ついには乗り越えられればという理想をこれからも追い求めていこうと思います。

特集 読書のすすめ

自らの人生観とライフスタイルを模索しよう！
ー筑紫哲也著『スローライフ（岩波新書1010）』を読んでー

一般文科　明官　秀隆

この本が問いかけているのは、80歳を一応の寿命とすると、私たちには約70万時間の生があって、8時間労働を40年間続けるとしても生きている時間の10％にも達しない。この人生の圧倒的な部分を占める90％も「ファスト」を続けるのかどうかということだ。

ここで紹介されているスローフード運動というのは、イタリアのブラというピエモンテ州の小さな村（冬季オリンピック開催地トリノのすぐ近く）から生まれた。ハンバーグに代表される、ファストフード店がイタリアに進出してきたことをきっかけに1986年この村に「スローフード協会」が作られた。ファストフードはグローバリズムの「食」における表現であり、世界中のどこでも、同じ規格の、同じ味をした食物や飲物が、しかも迅速に供される。スローフードは明らかにこの「食のグローバリズム化」への異議申し立てであり、別の選択肢の提示である。その活動方針は

①消えて行くおそれのある伝統的な食材や料理・質の良い食品・ワインを守る。

②質の良い素材を提供する小生産者を守る。

③子供たちを含めた消費者全体に味の教育を進めていく。の３点

やがてこの運動は、食文化だけではなく、我々の生活のあり方や人生・価値観（心のありよう）をあらわす「スローライフ」という言葉・考え方を生み出した。これは今日の資本主義社会の持つ、画一主義・効率主義・競争原理に対抗する考え方（価値観）にほかならない。わが国でも静岡県掛川市のように、〝スローライフシティ〟を宣言している地方自治体もある。

スローは英語では〝遅い・鈍い〟という意味でスピードを追求してきた近代社会には縁遠いように思えますが、流行語とさえなっている〝スロー〟は社会学者ポール・レイさんによると〝競争ではなく共生〟・〝結果よりプロセス〟を重視し、〝お金より時間〟を大切にし、『参加型の環境派』を指すそうだ。もう一つ大都市中心から地域中心への価値観の転換ともなる。〝スロー〟には人間性回復の積極的意義を見出すことがでる。

次にロハスのすすめの項では「もったいない」と「持続可能性」について語られている。ロハス(LOHAS)とは、〝Lifestyles of Health and Sustainability〟の頭文字をとったもので、〝健康と持続可能な社会を志向するライフスタイル〟という意味だ。日本でロハスという言葉が日常的に聞かれるようになったのは、2004年に入ってからだそうだ。「ロハス」は米国中西部ロッキー山脈の麓にある美しい街、コロラド州ボールダーで1990年代後半に生まれた、新しい価値観、ライフスタイルだ。

LOHASの「H」は「健康（ヘルス）」を意味し、LOHASの「S」は「持続可能性（サスティナビリティー）」という考え方で、再生可能な資源の利用によって次世代に地球環境を引き継ぎ、発展途上国の人々や人類以外の生物への〝思いやり〟も併せ持つ。個人の心と体の健康だけでなく、社会や地球の健康にまで配慮したライフスタイルや価値観、それがロハスの本来の意味なのだ。

環境分野で初のノーベル賞受賞者、ケニアのワンガリ・マータイ女史が世界に発信し有名にしてくれた日本語が「もったいない(2005国連演説)」で、その場で日本政府の3R運動・・リデュース（ごみの減量）、リユース（再使用）、リサイクル（再利用）を紹介してくれた。この「MOTTAINAI」には3Rどころか「持続可能性」に通ずるものがあり、元々日本人のもっていた感性・言葉を忘れてはならないという戒（いましめ）ともとれる。この「持続可能性」という言葉は環境問題を考える上での、一番中心にある概念なのだが、実現はとてつもなく困難で解決すべき技術的問題が数多く存在する。

これらの考え方を、学生諸君はこれからの技術者・研究者・生産者として自らの人生観・ライフスタイルを築く際の指針の一つとして捉え、人類共通の課題克服のために工学系の出身者としてチャレンジして欲しい。

特集 読書のすすめ

読書から学ぶもの

一般文科　赤塚　康介

幼いころから身近にある本は、色々な事を気付かせ教えてくれる存在であると思う。幼少のころは、絵本から文字とイメージ（視覚から得た情報）を関連付けて言葉を覚えたり、感性を養ったりする。小中学生になると、物語や小説から創造性や思考力といったものを学んでいく。そして、大人になると自己啓発や情報収集など様々な理由で本を読むようになる。このように、人は読書を行うことによって一人の人間として成長していくための糧を得ていると思う。

私の、読書歴を考えてみると、何度か無性に読書をしたくなる時期があった。それまでは、本には見向きもしないのだがその時期がくると暇さえあれば本ばかり読んでいたように思う。こういった時期に読んでいたのは、好き嫌いも関係なくとにかく有名な本ばかりであった。そのおかげで、人との会話の中で本の話になったとしてもあまり恥をかいた記憶はない。また、様々な本を読んでいく中で多くの主人公に出会ってきた。当然、彼らは千差万別の個性の持ち主達であり、人格や、考え方、好み等多様である。私は、そうした多様な生き方を持つ人間を本を通して学ぶことにより、私自身の生き方にかなり影響を受けてきたように思う。読む本によって受ける影響は様々であると思うが、私は多様なジャンルの本を読むことで偏った影響を受けるのではなく、バランスよく成長させてもらったように思う。私は、その多様なジャンルの本の中でも歴史小説に一番の影響を受けてきたように思う。歴史小説に出てくるような主人公は、良くも悪くも何か大きな仕事を成し遂げた人達であり、その生き方を学ぶことにより得られるものは大きい。例えば、武田信玄は「人は城、人は石垣、人は堀。情けは味方、仇は敵なり」という言葉を残している。これは、どれだけ城を堅固にしても、人の心が離れてしまったら世を治めることはできず、情けは人をつなぎとめ、結果として国を栄えさせるが、仇を増やせば国は滅びるという意味である。この言葉の持つ意味は、現代社会の中でもリーダーシップをとっていくために必要な心構えを説いているように思う。ちょうど、この原稿を書いているときにプロ野球日本シリーズの優勝が決まったが、西武の渡辺監督もインタビューの中でこの言葉を引用し、選手との信頼関係、人と人とのつながりの大切さを訴えていた。このように、本によって得られる知識や影響力は実社会の中においても非常に役立つものなのである。

ここで、私が最近読んだ本のなかから心に残っているものを紹介したい。一つ目は、北方謙三の「水滸伝」である。本のあらましは、北宋時代末期に汚職官吏たちがはびこる世相のため世の中からはじき出された英雄好漢たちが梁山泊と呼ばれる自然の要塞に集まって無法者の集団を形成し、やがて悪徳官吏を打倒し国を救う事を目指すという物語である。この物語には、百八人の豪傑が登場してくるのだが、その全てが独自の個性と人生観を持ち、自分の目的のために必死に生きている。この本を読むことで、生きることの意味や大切さ、意義のある人生の過ごし方などを教えてくれているように思う。二つ目が、「篤姫」である。私は、鹿児島の出身であるのでこの主人公には強い思い入れもあった。彼女は、江戸時代後期から明治の女性で、薩摩藩島津家の一門に生まれ、江戸幕府13代将軍徳川家定御台所（正継室）となった人物であり、幕末期の徳川幕府と討幕派の間で、壮絶な人生を生きた女性である。この物語では、家族に対する愛が彼女の生きる糧となっており、自分の持っている家族への愛に対して考えさせられる話であった。

私は、読書によってこれまで多くの知識を学び、自分という人間を形成していくための糧を多く得てきたように思う。皆さんにも、忙しい時間の中ではあるけれども自分を成長させていくために是非読書を行ってもらいたい。ある日、自分の人生観や生き方を変えるほどの本に出会い、素晴らしい人生を過ごせることを祈っている。

特集 読書のすすめ

島尾ミホ著「海辺の生と死」

一般理科　宮地　俊彦

島尾ミホは夫である作家島尾敏雄の一連の病妻シリーズ，ことに「死の棘」のモデルとして有名であった。「死の棘」においてミホは夫の浮気を執拗に理不尽に呵責する妻として描かれている。読者も世間も小説を通してミホを夫の浮気に逆上し，気を狂わせた妻というように考えていた。

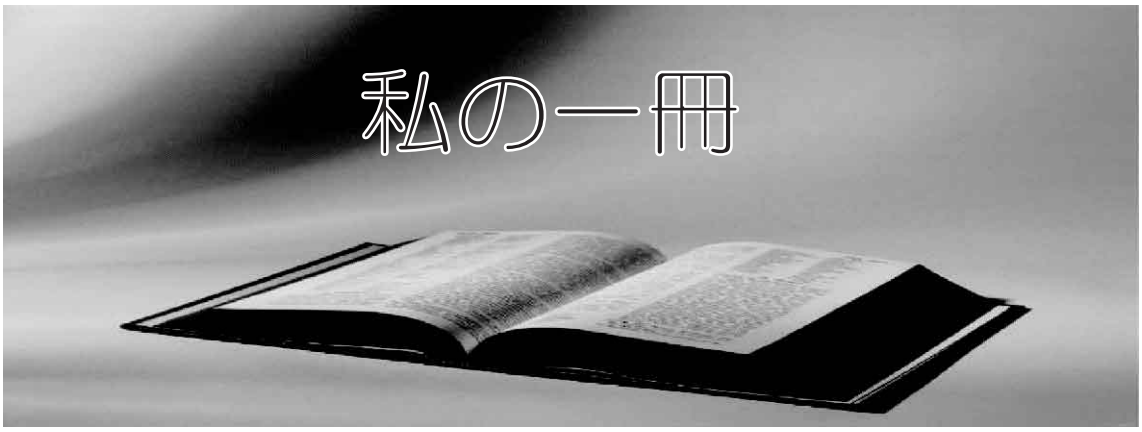
ところが，人々は渡辺外喜三郎が発行する同人誌「カンナ」に彼女が「海辺の生と死」を連載することによりその作品世界を通して，現代社会にあっては奇跡的とも言える，純真むくな心の持ち主としての彼女を知り，同時に作家としての類まれなる才能を彼女の内に発見し驚愕したのである。昭和49年には「カンナ」に掲載された作品に多少の補充がなされ双樹社より出版され，この作品により「田村俊子」賞を受賞することとなった。その後この作品は昭和62年作品順序の入れ替えが行われ，中公文庫の一冊として更に多くの読者を獲得することとなった。

「アセーマンギンナヨー，マンギンナヨー，アセー（アセーころばないでねー，ころばないでねー，アセー）」足の悪い著者の母が丸木橋を渡っているのを見た，ヒロコ坊（女の子）が力をこめて叫んでいるのである。「アチェー，ヤマヌナーヤ　ティファザキヌヤマ　アタドー（アチェー，山の名前はティファザキの山だったよー）」どこに行くのかと，著者の母に尋ねられた小さな男の子のトク坊やが，「ヤマヌナーヤ　ワシレタ」と答えたが野道を走り，浜辺の岩場を渡り，山の裾に辿り着いたとたんに思い起こし，アセの見えるところまで駆け戻り両の掌を口のそばにあて，叫んでいるのである。（アセとは〈おくさま〉の島方言）作者の母は繰り返し，この話をみんなに話していたという。著者の母にとっても胸に迫る懐かしい思い出の風景であったのだろう。

これら二つの情景は，作者のふるさと，奄美大島の離島，加計呂麻島における大正末期から昭和初期にかけてのものである。電気も水道も当然のことながらガスも無く，茶を入れるために近くの泉に水汲みに行っていた。生活はまさに自給自足に近い今の私たちのものとはあまりに隔絶された世界の話しである。

ところが，ヒロコ坊とトク坊やの声が心地よく心に谺まし，安らかで穏やかな気持ちに誘いこむのはなぜであろうか。作品中には「旅のひとたち」の一つとして「赤穂義士祭と旅の浪曲師」もある。この祭りを楽しむ小学生あるいは教師の姿が活写され，更には山頭火言うところの孤独な漂泊を続ける「世間師」の姿も島の人としての立場から，感傷に流されること無く見事に切り取られ作品に奥深さを与えているのである。

最近の社会情勢の変化は，地方の衰退という重い課題を私たちに突きつけている。日本の果てともいえる離島の八十年前に，物質的生活には恵まれなくとも，心豊かに自然と一体化して生活していた多くの人々がいたことは，あるいはこれからの私たちの生き方を考えるよすがともなるかもしれない。作者は夫との思い出の生活の場であった奄美大島で，敏雄死後，14年間喪服を通し続け，彼の日記を清書する日常の中で，誰に看取られることも無く逝き，すでに二年の時が過ぎようとしている。



伊坂幸太郎著

陽気なギャングが地球を回す

祥伝社

「銀行強盗は４人が適切」いきなりそんな解説から始まる犯罪小説。強盗犯とは思えない陽気な、うそを見抜けるリーダ、演説好きな男、天才スリ師、完璧な体内時計を持つ女。強烈な個性の４人が愉快に痛快に銀行強盗を計画実行していく。

今回も成功するはずの銀行強盗だが予想外のアクシデントで奪った金が行方不明に。さらにメンバーの息子は学校でいじめられるべきかも、などとなぞの発言をして・・様々な不安となぞが強盗犯メンバーを取り囲んでいく。

２５０ページの長さも気にならないほど引き込まれていく文体、クライマックスには意外な伏線からくるどんでん返し。何度も読み返したい一冊。

（機械工学科５年　黒田　雄太）

小野不由美著

十二国記

講談社

「・・・やっと見つけた。」そう言われた主人公はケイキという男によって月の影を通り異世界へ連れて行かれる。そこは人と妖魔、獣と神仙の世界だった。何一つ分からない中、災厄の元凶「海客」として追われる主人公。誰一人味方のいない世界で故国に戻るため彼女は戦い続ける・・・。（第一巻「月の影、影の海」）

この本は全体を通して〝人の精神的成長〟をテーマにしており、主人公を取り巻く環境とそれに伴った感情の変化、それに明解な文章で書かれた戦闘シーンなどが加わり切実な思いと迫力が表現されている。その他、多種多様な考え方を持った登場人物や緻密に構成された世界などにより読み返すごとに面白さを増していく作品となっている。全１１冊（うち５冊外伝）の中の多様な人物たちから共感、反発、励み、新鮮さなど多くのことを感じ、考えることができる本なので是非一度読んでみることをお勧めしたい。

（電気電子工学科4年　平島隼平）

バフェット著、ゲイツ著、センゲージラーニング株式会社編

バフェット＆ゲイツ後輩と語る　学生からの２１の質問　英日バイリンガル版

センゲージラーニング

この本を自信持ってお勧めしたい。特に英語の勉強をしている人やユーモアのセンスを鍛えたいと考えている方に。

世界一の投資家ウォーレン・バフェット氏とマイクロソフト会長のビル・ゲイツ氏がネブラスカ大学の学生の質問に答える模様を収めた付属DVDとその原文（左ページ）・対訳（右ページ）がこの本の内容です。

まず、良かったことは著名な二人の肉声が聞けること。ずば抜けたユーモアと話の深さに感動できます。また、二人の考える〝才能を持った人物像〟が語られている所はとても参考になりました。

もちろん、英語の勉強にもなりますので受験を控える4年生、編入予定の5年生には是非読むといいと思う、私の一冊です。

（制御情報工学科５年　高瀬章充）

サイモン・シン著　青木薫訳

暗号解読

新潮社

私がこの本を読んだ感想なのだが、正直なところ、暗号の話にここまで興奮するとは思っていなかった。

この本は、古代から現代へと至るまでに生み出されたさまざまな暗号とそれにまつわる人々について記された、いわば暗号の歴史書である。

この歴史書には、暗号作成者と解読者の戦いが記されている。暗号作成者は絶対に解読されないようなすぐれた暗号を作成する。一方解読者は、どんなに困難な暗号も解読する。再び作成者は、こんどは一段とすぐれた暗号を作成する。

ここにドラマがある。そして、非常に面白い。

特に私は、第二次大戦中ドイツが開発した暗号作成機〝エニグマ〟と、このエニグマが作り出す暗号を解読しようとした解読者たちのドラマ（第Ⅳ章）がお気に入りである。

このエニグマ、まさに難攻不落なのだが解読者達はすぐれた頭脳、そして脅威の粘り強さで挑み、ついに解読してしまうのである。これはすごいと心から思った。

私の稚拙な文章では本書の魅力が全く伝わってこないのだが、しかし、この本は本当に面白い（友達も面白いと言っている）。ぜひオススメしたい。

（生物応用化学科３年　松尾翔平）

神林長平著

今宵、銀河を杯にして

早川書房

『戦闘妖精・雪風』で有名な神林長平の作品です。この小説は、異星体との戦争が続く未来の惑星ドーピアを舞台とした、戦車兵達と「マヘル - シャラル - ハシ - バズ」という長ったらしい名前を付けられた人工知能戦車の交流を描いたSF小説です。「野生化」する旅団指揮コンピューターや「繁殖するアンドロイド」などの著者ならではの発想を展開していきながら、機械と人間、異星体の関係を描こうとしています。

雪風とはまた違った視点で描かれているので是非、読み比べてもらえればと思います。

（材料工学科5年　溝上智久）

山田ズーニー著

おとなの小論文教室。

河出書房新社

私が紹介する本は「ほぼ日刊イトイ新聞」のコラムを単行本化したものです。最初にこの本を手に取ったときには、その題名から小論文を書くための本と思っていましたが、実際の内容は、いかに自分の思いを相手に伝えるか、伝わるようにできるかという「表現」ということについての話でした。

「表現」とは世界に向かって自分を開くという姿勢で臨むこと、そこから自分の本当の思い、他者との関わりが広がるということを解りやすく紹介しています。この本を読むと人との関わりについて考えさせられる事が多く、非常に面白いので、ぜひ皆さんも読んでみてください。

（機械電気システム専攻１年　窪山雄太）

リレー連載「古典への誘い」

コロ助の科学質問箱
佐々木宗雄 監修・内山安二 絵

生物応用化学科　笈木　宏和

科学の原典と言われる本とはどのようなものがあるか。コーンスタンプの生化学であったり、モリソンボイドの有機化学であったりと、人によって答えは様々なものかもしれない。しかし、誰もがそういったものを学ぶまえに、科学の世界に対して興味を引きつけられたものがあるはずだ。小学校の時の理科実験であったり、生き物の観察であったり、テレビの科学番組だったり。多くの科学者はそういったものを通じて不思議な現象に興味を抱いてきたに違いないはずだ。

特に、最近の科学者は映像メディアによる影響も大きい。我々の上の世代はものしり博士のケペル先生や四つの目、我々の世代にはみんなの科学やウルトラアイなどの科学情報番組にて「科学のおもしろさ」を焼き付け、それを原典にしている人間も多いと思う。今回の執筆にあたって、おそらく科学を志す人の多くが一度は見たと思われる「科学まんが」を取り上げて、そこから学ぶべき内容について記述していきたい。

科学まんがは、学研を中心として多くの種類が出版されているものであり、わかりやすい内容と写真・挿絵などを用いて子供たちの興味をかき立ててくれたものであった。学研が出版した多くの科学まんがは「〇年の科学」という、小学生を対象とした月刊誌に連載されたものをまとめたものであり、多くの小学校の図書館に当たり前のように置かれていたものである。例えば、後述の作品の姉妹品である「科学物知り百科」(監修：佐々木宗雄・絵：内山安二)や、トン、チン、カンの3人が博士と共に身近の不思議なこと、疑問に思ったことを学んでいく「トン・チン・カンの科学教室」(監修：青木国夫・絵：渡辺省三)など、こういった本は多くの図書館に当たり

のように置いてあり、多くの子供たちが喜んで読んだものだ。（もちろん、文字ばかりの図書の中の数少ないまんがであるからと言うのもあるだろうが。）その中でもいわゆる「科学まんが」の原典とも言える初期の名作と言えば「コロ助の科学質問箱」であろう。初版出版が1972年であり、40代以下の世代で、図書館に通った経験のあるものには非常に有名な本ではなかろうか。たとえタイトルで作品が思い出せなくても、登場人物をみれば「ああ、あれか」と思い出す人も多いはずである。

このまんがは、主人公であるコロ助くんとそのペットのネコのニャーゴとネズミのチュー助が、身の回りの不思議な事例に疑問を持ち、その謎を自分たちや、有名な科学者の先生のところに行って解決するというスタイルであり、図や写真を使いながら難解な内容も非常にわかりやすく解説してくれている。

例えば、「まさつ」について。登場人物が摩擦のあるなしについて話し合う。コロ助は「摩擦のせいで人々はものを運んだりするときに苦しめられる。摩擦を軽くするためにタイヤを作ったりして摩擦から逃れるような工夫をしているんだ。こんなものは無くなった方がいい」というと、ニャーゴは「摩擦がないと屋根の上に上ったときに引っかからなくて落っこちてしまう、これは困る」と反論する。どちらがいいのかわからない。そこで、正しい答えを科学者の先生に聞きにいくと、科学者の先生は丁寧に「スケートは摩擦を小さくしたものだけど歩くのが大変だ。摩擦を小さくしてしまったら歩くこともできないんだよ。それに、摩擦がなければくぎを打てないので建物を建てることもできないし、山や谷もできなくなってしまうんだ」と教えてくれる。

こういった双方からの異なった視点から意見を出し合い、最終的にはどちらが正しいかを先生に聞きに行くというスタイルは今から考えれば読んだ人間に「考える力」を身につけさせ、科学に対する興味を喚起する上で非常に優れた読み物であったのではと思う。もちろんこのようなスタイルだけでなく、自分たちだけで考え、最終的に結論を導き出す内容のものもある。双方とも、「自分で考えよう」といったことを読み手に促す造りとなっている。これは教育の現場においても同じことではないだろうか？相手に疑問点を出し合わせ、自分の頭を使わせること。現在の教育現場にこそ改めて意識しなくてはならない課題である。

この「コロ助の科学質問箱」、すごいことに36年の月日を経た現在でも版を重ね購入することが可能である。今回、この記事を書くに当たり久々に購入し、読んでみたのだが、多少の古さはあるものの、今見ても充分に楽しんで読むことができる。テーマに普遍的なものを選んでいるためか、今になっても充分に通用する内容となっている。興味のある方は「再読」をお勧めする。

さて、現在これらのまんがは2008年の現在においても続いている。現在は、あさりよしとおさん(有名なロボットアニメの敵デザインをした(非公認)ことでも有名な方であるが)の「まんがサイエンス」が学研の学習雑誌に連載されている。前述の、自分たちで知恵を出し合い、それを専門家(デフォルメされたキャラクターに置き換えられているが)が回答するというスタイルは健在であり、今の世代も我々と同じように科学に興味を持つ人たちが出てきているのであろうと思う。

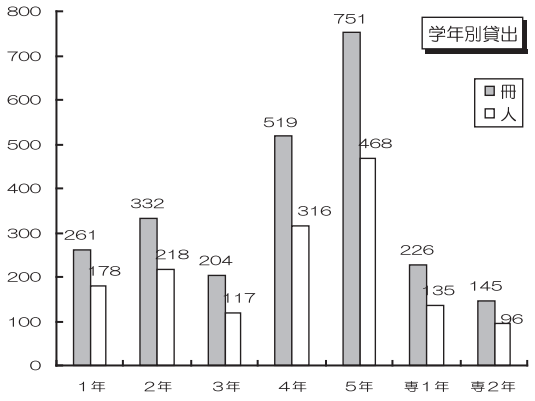
科学の世界にチューいせよ！

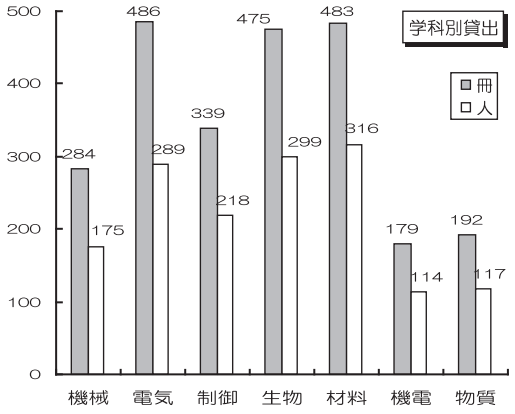
平成２０年度前期　図書館利用統計

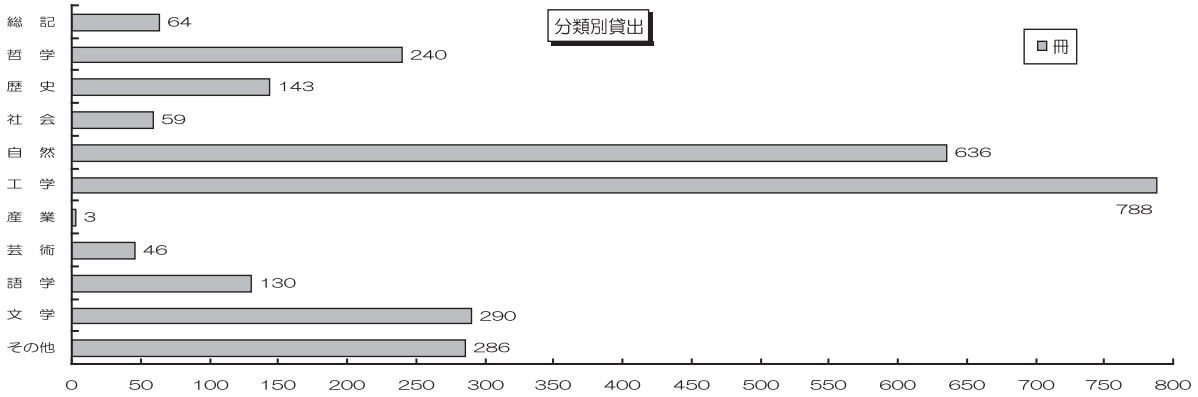
◆開館日数及び入館者数

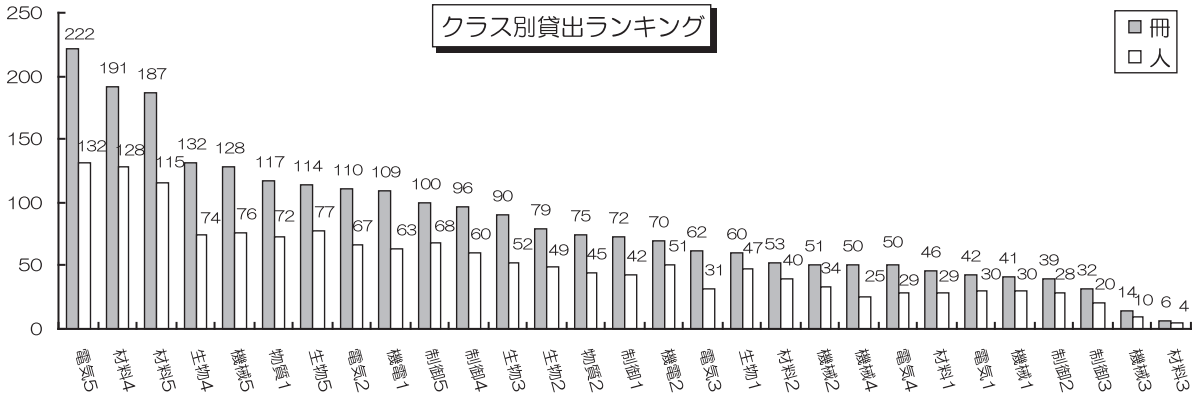
月	開館日数	入館者数 平日 時間内	入館者数 平日 時間外	入館者数 土曜日	入館者数 合計	一般利用者数（内数）	一日平均入館者数（四捨五入）	開館時間
4	24	3,445	652	223	4,320	19	180	※平日（時間内）9時～17時
5	24	4,097	966	242	5,305	17	221	※平日（時間外）17時～20時
6	25	3,134	821	239	4,194	24	168	※土曜日 17時～20時
7	24	3,034	470	84	3,588	22	150	
8	18	1,040	0	0	1,040	16	58	夏季休業中は時間外なし 土曜休館
9	24	2,404	717	336	3,457	20	144	
合計	139	17,154	3,626	1,124	21,904	118	158	

◆図書貸出状況









INFORMATION

下記のとおりお知らせいたします。 開館時間の変更及び臨時閉館にはご注意ください。

++

◆特別（長期）貸出について

冬季休業中の特別（長期）貸出を下記のとおり行います。
貸出期間：１２月１７日（水）から
　　１２月２４日（水）まで
返却期限：　１月　７日（水）
貸出冊数：　５冊以内
（一般利用者及び教職員は従来どおりです。）

++

◆開館時間の変更及び休館日について

冬季休業及び年末年始は下記のとおりです。

１２月２２日（月）	９時～２０時	1月	1日（木）	休館（元旦）
２３日（火）	休館（天皇誕生日）		2日（金）	休館
２４日（水）	９時～２０時		3日（土）	休館
２５日（木）	９時～１７時		4日（日）	休館
２６日（金）	休館		5日（月）	休館
２７日（土）	休館		6日（火）	9時～17時
２８日（日）	休館		7日（水）	9時～２０時
２９日（月）	休館			
３０日（火）	休館		以降通常どおり	
３１日（水）	休館			

++

◆◆◆　卒業・修了予定者への貸出等について　◆◆◆

今年度卒業・修了予定者への貸出は下記のとおりです。
貸出：２月２８日（土）まで　　返却：３月７日（土）まで

図書返却日は厳守　飲食物の持込禁止
携帯電話は使用禁止　騒がしい行為・会話は禁止

《編集後記》

今回も、バラエティーに富んだたくさんの書籍の紹介がありました。専門書に始まり、生き方、自己表現に関するもの、歴史文学、純文学、娯楽ものから科学漫画の時代考証まで。多岐にわたるジャンルはそのまま、久留米高専を久留米高専たらしめている人々の多様性を表しているようにも思います。

学生の皆さんの投稿で印象深い言葉に引き付けられました。『引き込まれていく』、『何度も読み返したい』、そして『考えさせられる』。なんでもない言葉ですが、それは今の私たちの日常に欠けている何か・・・かもしれません。手のひらサイズの小さな箱の世界に没入し、違う世界の言語で語り合う若者達の中に入っていくのが辛くなってきた一教師としては、学生の普遍的な姿がまだまだ健在なことに少しほっとした気分を味わいました。

（図書主幹　中坊 滋一）

発行日：平成２０年１２月１５日
発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館　Tel：0942-35-9306　Fax:0942-35-9307
〒830-8555 久留米市小森野一丁目１番１号　E-mail:L-staff.SAD@ON.Kurume-nct.ac.jp